

テーマ	要約3. 新百合ヶ丘における芸術文化活動に関する調査研究
代表研究者	昭和音楽大学 武濤京子, 日本映画大学 藤田直哉
研究目的	芸術文化のまちとして発展してきた新百合ヶ丘地域の芸術文化のまちとしての形成過程、現在の芸術文化活動の実態と効果を明らかにするもの。
研究方法	<p>①新百合ヶ丘地域の芸術文化関係者(17名)に対する定性調査により、新百合ヶ丘周辺地域における芸術文化のまちづくりの経緯、課題を明らかにした。</p> <p>②新百合ヶ丘周辺(麻生区)住民に対するWebアンケートによる定量調査により、住民の芸術文化に対する意識や活動の実態、その特徴などを客観的に明らかにした。</p>
主要な研究結果	<p>1) 芸術文化関係者インタビュー調査結果</p> <p>①映像・文学の時代 1927～1960年代 文化人がこの地に居を構え、様々な文学者が訪れ、映像関係者も住み始めた。</p> <p>②地域文化の時代 1960～1970年代 藤田親昌が、地元住人と交流しながら地域の人々を「つなげる」編集者として活動はじめた。</p> <p>③「第一のまちびらき」時代 1970～1980年代 農住都市構想が推進され、「自然豊かで上質な暮らし」という性格が形成されていった。</p> <p>④麻生区誕生の時代 1980年代～1995年頃 市民ホールの建設運動に多くの市民が参加し、川崎市が「芸術のまち構想」を打ち出した。</p> <p>⑤バブル崩壊の時代 1990年代～2007年頃 KAWASAKIしんゆり映画祭が開始し、独自の芸術文化活動が開始され始めた。</p> <p>⑥「第二のまちびらき」時代 2007年～ 文化庁の芸術のまちづくり事業に認定、川崎市アートセンターの開館、昭和音楽大学の移転とオペラハウスの完成、日本映画学校の大学化、アルテリッカの開催などが続き、現在に至る。</p> <p>2. Webアンケート調査結果 新百合ヶ丘(麻生区)は住民の芸術文化鑑賞やボランティアを含む実践活動への参加意欲が高く、それをかなえる「場」として多くの芸術文化施設やイベントが提供されていることが確認できた。 特に、観賞場所として、自宅を除くと東京よりも新百合ヶ丘での鑑賞が多く、東京での鑑賞が多い多摩区、多摩川以東・以西の地域と結果が異なった。</p> <p>教養・文化度の高い住民が多く、生活水準が高い層やシルバー層を中心に、芸術を活かしたまちづくりへの一定の評価がある一方で、次の担い手であるミドル層、ヤング層の認識や評価とのギャップも存在している。 芸術文化活動への参加が、シビックプライドを高め、まちへの愛情や誇りにつながると考えれば、世代を超えた交流や情報発信などを生み出し育む「しかけ」が大切であることが明らかにされた。</p>